

聖人^ハ不^レ期^セ修^古ヲ

上古^ノ之^世、人民^{ナクシテ}少^ク而^禽獸^衆、人民^不勝^タ禽獸^虫蛇^有リテ

聖人^作、構^木為^巢、以^避群^害而^民悦^之、使^王天下^号之^ヲ

曰^フ有^巢氏^民食^果蓀^蚌蛤^腥臊^惡臭^而傷^害腹^胃、民^多

疾病^有、聖人^作、鑽^燧取^火、以^化腥^臊而^民說^之、使^王天

下^号之^ヲ曰^フ燧^人氏^中古^之世[、]天下^大水^而鯀^禹決^瀆、近

古^之世[、]桀^紂暴^乱而^湯武^征伐[、]今^有構^木鑽^燧於^夏后

氏^之世^者必^為鯀^禹笑^矣、有^決瀆^於殷^周之^世者^必為^湯

湯^武笑^矣、然^則今^有美^堯舜^禹湯^武之^道於^當今^之世[、]

者^必為^新聖^笑矣[、]是^以聖人^不期^修古[、]不^法常^可論^世

之^事、因^為之^備、宋^人有^耕田^者、田^中有^株、兔^走觸^株、折^レ

頸^而死[、]因^積其^未而^守株[、]冀^復得^兔、兔^不可^復得^而身^ハ

為^宋国^笑、今^欲以^先王^之政^治、當^世之^民皆^守株^之類^也、

【書き下し文】

上古の世、人民少なくて禽獸衆し。人民禽獸虫蛇に勝たず。聖人作る有りて、木を構へて巢を為り、以て郡害を避く。而して民之を悦び、天下に王たらしめ、之を号して有巢氏と曰ふ。民果蓏・蚌蛤を食らひ、腥臊悪臭にして腹胃を傷害し、民疾病多し。聖人作る有りて、燧を鑽り火を取り、以て腥臊を化す。而して民之を説び、天下に王たらしめ、之を号して燧人氏と曰ふ。中古の世、天下大水ありて、鯀・禹瀆を決す。近古の世、桀・紂暴乱して、湯・武征伐す。今夏后氏の世に構木鑽燧する者有らば、必ず鯀・禹の笑ひと為らん。殷周の世に決瀆する者有らば、必ず湯・武の笑ひと為らん。然らば即ち今堯・舜・禹・湯・武の道を当今の世に美とする者有らば、必ず新聖の笑ひと為らん。是を以て聖人は修古を期せず、常可に法らず。世の事を論じ、因りて之が備へを為す。宋人に田を耕す者有り。田中に株有り、兔走りて株に触れ、頸を折りて死す。因りて其の耒を釈てて株を守り、復た兔を得んことを冀ふ。兔復た得べからずして、身は宋国の笑ひと為れり。今先王の政を以て、当世の民を治めんと欲するは、皆株を守るの類なり。

【口語訳】

上古の世には、人民は少なく鳥獸の類が多かった。人民は鳥獸、虫、蛇の類に勝てなかった。(そこに) 聖人が現れて、木を組み合わせて巢(のような家屋)を作り、もろもろの害を避けられるようにした。そこで人民は喜び、(この聖人を) 天下の王に頂き、名づけて有巢氏と呼んだ。(また、この頃) 人民は木の実と草の実、はまぐりの類を食べていたが、生臭く悪臭があつて胃腸に害を及ぼし、人民は病氣にかかることが多かった。(そこに) 聖人が現れて、木をこすったり、火打ち石を打ったりして火をおこし、生臭さを(煮たり焼いたりして) 消し去った。そこで人民は喜び、(この聖人を) 天下の王に頂き、燧人氏と呼んだ。中古の世には、世の中には大洪水があつて、鯀と禹王とが水路を切り開いて水を流させた。近古の世には、桀王と紂王とが暴政を行つたので、湯王と武王とがこれを征伐した。今もし、夏王期の世に木を組み合わせて巢を作つたり木をこすり火打ち石で火をおこしたりする者がいれば、きつと鯀と禹とに笑われるであろう。殷や周の世に水路を切り開いて水を流す者がいれば、きつと湯王と武王とに笑われるであろう。そうだとすると、もしも堯、舜、禹、湯、武の行つた道を今の時代にほめたたえる者がいれば、きつと新時代の聖人に笑われるであろう。こういうわけで、聖人は遠い昔を求めず、固定した基準にのつとらない。その時代の事を論じ、それによつて(必要な) 方策を立てる。宋の国の人で田畑を耕す者があつた。田畑のなかに切り株があり、(そこに) 兔が走つて来てその株にぶつかつて、首を折つて死んだ。そこで(この男は) すきを投げ捨てて切り株の番をし、もう一度兔を手に入れたいと待ち望んだ。(しかし) 兔は二度とは手に入れることはできず、わが身は宋の国の人々に笑われてしまった。今、先王の政治で、現代の人民を治めようとするのは、みなこの切り株の番をした者の類いである。

